

野上源生子全集

第Ⅱ期

第十三卷

岩波書店

野上彌生子全集
第II期 第十三卷

第十九回配本
(全二十六卷)

一九八八年一月七日 発行

定価四七〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
鉄 道 岩 波 書 店

電話 〇三三六二四二二
振替 東京六三六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

昭和三十三年	一
昭和三十三年	三
昭和三十四年	四〇
昭和三十五年	五三
後記	七二

昭和 32 年 1 月

昭和三十^(三)七年一月一日 火 晴

松井とホールの炉に火を焚き、電気ストーヴも使つてあたたかい朝祝ひをする。「朝日」の婦人欄に書いた「歯車に〔も〕薔薇を」の一文が出てゐる。ラヂオ年賀状といふので、いろ／＼な人の声をきく。谷崎潤一郎の調子がすっかり下町のおつさんなのに一寸おどろいた。思へばあたりまへの事であるが。一人一人の紹介にアナウンサーがのど自慢の時のやうな批判を入れるのは、前まではしなかつた事のやうだが。私には不快におもへる。

MとYの家族みんな集まる。おヒルは例年の通りパンを焼いてカンタンな食事とともにする。市河おぢいさんも一寸顔を見せる。年賀には宝生彰彦がたつた一人玄関まで。

一月二日 水 晴

おひるごろ岩田さん。本多顯シヨウのハガキのことを話しても彼は信じない様子である。まだ岩田さんのゐる時に豊田実氏が見える。さうして豊田さんがまだ残つてゐるところへ矢崎さんの娘さん四人、道子、文子、のり子、綾子さん打ちつれて来る。道子さんは学習院の短大を出てその事務に働いてをり、文子さんは青山学院の英文科、のり子さんは女子学院、綾子さんは早稲田のドイツ文学、さうして彼女はスポーツとしてフェンシングをやつてをり、のり子さんはバレエ。またアル

バイトでそれ／＼収入をえてゐる由、みんな一つか二つ違ひだから二十をやつと過ぎた娘が四人そろつたところはなにか壯観である。この下に中学三年と一年生の男の子があるのだから、亮子さんも一大事業を行つてゐるに等しい。子供の絵の生徒が二十人位あり、なほ他に二ヶ所幼稚園に教へに行つてゐるとのこと。

和、謙、三千も呼び、おそばで早い夕食にする。

長尾家が邸宅とともに隣りのアキ地をゆづり渡したのはタイワン人とのこと。それは四十ほどの女主人で、レーン・ボウのすべての店をやつてゐる。それが一寸ケタはづれの贅沢をしてゐる。子供が男四人、女二人、自分の実子が貰らひか知らないが、もう二十以上で、いつもすごい身なりをして、一人一人が最新式の自動車をもつてゐる。女主人の好みは白と黒の色彩。自分はいつも白い振袖をきて、下げ髪、矢崎家の後ろの空地は庭園にして、悉く白い薔薇をうゑ、白孔雀を飼ひ噴水をつくり、白い体育館を建てゝゐる。矢崎家はその端の隅っこにあり、地置も少し高みだから、窓からこれらが見おろされるし、先方としてはなによりジャマモノのわけなれど、亮子さんが移転料を現金で要求してゐるため、そのまま居すりになつてゐるらしい。

東京は思はないところに、思ひがけない生活者があるものかなと驚かれる。先生より花のとどいた手紙を頂く。

一月三日 木 晴

朝桜間さんとの対談をラヂオできく。わりにいや味なくはいつてゐる。朝日賞は池田亀鑑氏の源氏

物語の研究が入つてゐる。私のおそらく思想的な点で忌避されたのかも知れない。すり換えもきつと池田氏の死が一つは原因になつたのかも知れない。ちよつと意外なおもひであるが、またそれでもよしといふ氣もする。岩波の方面でもこれは予期しなかつた事かと察しられる。何故ならば同じく入賞となつた西岡虎之助氏の莊園史と迷路の二つだけを、店としては珍しく大きく広告してゐるから。まあ、すべてを過ぎたこととして、あとの続稿に思ひを集中すべきである。午後は牧瀬さんが見える。上の息子がもう高校に入つた由、顕治さんの再婚は、代々木でも牧瀬氏あたりはしらないとの事である。

一月四日 金 晴

大島氏の論文をよみつゞける。

午後成瀬さんへ年賀の答礼に行く。彼は伝へられるやうな皮肉屋とは私には感じられない。むしろ人のよい正直者におもはれる。鶴見氏とは一高での剣道仲間、何度も訪ねたが、彼はやつて来なかつたのに今度は出掛けて来た。新年も千来万客かと思つて行つたら、一人でぽつんとしてゐたの、著書を百冊書いてゐるさうなのと、それをえらいことのやうな調子で語るのである。一昨日「迷路」の話がでたので、今日もつて行つたが、うちにもみんなはもう揃つてゐない。もうすこし店から取りよせなければなるまい。加藤夫人来訪のデンワで辞去、轡子ちゃんも見えてゐた。江島へ松崎さんがかたづいた時の招宴に、弓子さんが引つ張りだされた由、故駐仏大使未亡人の肩書きが利用されたわけであらう。小山さんも落ちあふ。羽衣を一番うたふ。玄関へ見送つた時、没落のニュース

の入つてゐた店のことにいつてたづねて見ると、どうにか整理ができて、また仕事ははじめられる事になつた由、昨年は利子だけ千何百万と払つたとのこと。それで商売がなりたつわけではない。

加藤母娘に三千子を交へて晩食を俱にする。——モキ一家は今日はママさんから宇野さんへ行つた——弓子さんの手彫りの手紙挟しを頂く。北軽の豆と御能物語返礼 先生へ手紙。大晦日前から無熱ながら風邪がきみであつたのが、今日はじめて本統の生理状態になつたらしい。夕飯を味よく食べたのは数日ぶりである。

かうして新年の客を迎へて見ると、ホールに二百ボルトの電気ストーヴを入れたのが全くよかつたと思はれる。炉ダンの火はほんの飾りだけに焚いて、十分にあのひろい部屋が暖められる。京都の小林氏から浜焼きダイ届く。

一月五日 土 晴

大島氏の論文をつづける。年賀状の書き添えもまだある。小林氏に御礼の手紙。午後日暮里の望月一雄さんが年賀とともに北軽から送つたドラムカンの送料その他の立て替金持参、流儀の話いろいろ。彼は家元解消を是とする。しかしこの問題はなまじつかには手がつけられない。風戸さんに年賀に行つた序でに市河により一寸おしやべりする。成瀬さんが彼の再婚もんだいについて話した事を伝へて見た。同時に七十七で三十五の若い女と再婚して、すぐ死んだ人のことを、同じおしやべりにした事をもあはせて伝へた。——冗談のやうに。このごろの市河の生理状態は、こんな話もうわの空ではないくらゐ元氣に見える。それだけ外側からこの種の話がでるのであらうが、これもな

昭和32年1月

まじつかには手をつけてはなるまい。私が77と35の事をわざと伝へたのも、一つは警戒であるが、さてぴんと来たかどうか。谷崎のカギの話までした。私はあれは構想としてまづいと分析的な批評をすると、同感のやうにきいてゐた。

一月六日 日 晴

毎日の日課となつてゐる大島氏の論文。今晚は小林氏よりの浜やき鯛で市河おぢいさまも加へて会食。おそうめんにする。杉並の熊谷さんの貞ちゃんも遊びに来たので子供たち四人で大にぎやかである。

午後は今泉さんが娘さんをつれて見える。耀三と三枝子は三千子をつれて坂井さんのところのお招ばれで留守であつた。今泉氏はいま勤めてゐる千葉の学校のごたくで臭つた体に見える。よい人間に違ひないが、往時の兵タイさんで、自分の意志通りにことを行つた流儀がでるのではないかと思ふ。

一月七日 月 晴

論文の日課、第二章の想起、反覆、期待に入り、これもこの夏先生の講義で親しんだもの故、いつそう興味深くよまれる。午後おそく多田さんと中川さんが見える。迷路六と御能物語呈上。「迷路」はうちにあつたものが殆んどなくなつた有様で、玉井さんに追加をデンワで頼む。自分のものを自分ひとりで買つてゐる気がする。

一月八日 火 晴

大島氏の論文読^マ読。午後古田登氏来る。「迷路」についての「文芸」のための会談を土曜日として終に承知する。仕方なし。

一月九日 水 晴

大島氏の論文はストアのところに入り、エピクテータスからマルクス・アウレリウスと心を深く打つ。瞑想録もついでにより度い。執筆ほどではなくとも、こんな読書の日課にはかなりな疲れがかんじられる。夜ラヂオの教養講座での西洋と日本の道德の比較をきく。上原氏がはなはだ正しい妥当な意見をのべられる。亀井氏が日本では罪を文学で美にしてしまふといふ見方も正しい。罪も叙情的に生あたたかく溶かされ、ヨーロッパ風な厳しさが消滅するのである。野坂夫妻より手紙。迷路のついた御礼。それをよんだあと、氏から訪問するとある。河野さんを通して延安の生活についてきき度いといつてやつたのに対して。朝日放送の雑誌に書いた延安についてのキリぬきも封入されてゐた。

一月十日 木 晴

大島氏の論文。ヨブの反覆に入りかけた。先生があき足りなさをいはれるのはこれから先きの部分であらうが、私にはまだ十分教へられるところが多い。

安倍さんに手紙。佐藤芳彦より虚子の招待初うたひ会に、彼が不参といつて来たので、私にもう一度勧めて見てくれとのハガキが来たからである。あえて勧めの文句は入れず、佐藤さんのハガキ同封した。二三日まへ小林さんにデンワできくと、岩波さんの伝記、とにかく七日一応すんだが、そ

のまは使へず、訂正加筆してゐるとの事故、気持の安定がないのであらう。

婦人民主新聞の本多さんと会見。彼女は戦前から漢口の学校で日本語を教へてゐた婦人との事で、その話が興味多かつた。漢口の女学生たちで、ひそかに延安に行くものがあつた。マッチを一箱もつて、それを売りながら行くと結構旅費になつた。漢口はなかなか生活水準が高く、女学生の食事なども魚と肉 野菜、トウフの四種がつく。トウフは絹ごしのやうな旨いものができる。家は暑い夏にそなへてカベあつく、窓小さいから、冬はひどく寒い。火鉢に火を入れるだけの暖房。外トウを部屋でも着てゐる。裏に羊の毛皮のついた上衣をきる。藍いろ木綿の服は、蒋介石の新生活運動からで、ドイツ染料で、洗たくしてもはげない。

方々から雑文その他を書けといふ。みんな断る。

夜七時のニュースでイーデンの辞職をきく。いふまでもなくスエズもんだいが祟つたのである。右派に押しきられた弱さをおもふとともに、またそれだけ強い右派的な勢力が英国に根を張つてゐることを知らなければならぬ。

一月十一日 金 曇

午前から正子と新宿に出掛ける。ウエスタリアで今度結婚した伊都子へのプレゼントとして頸飾り、相手の松尾氏へネクタイを買ふ。それから新宿劇場で映画を見る。一つはモンテカルロで自動車競争ばかりする。後は「バスの停車場」マーリン・モンローといふ女優をはじめて見る。いかにも皮膚の柔らかさうな、ぐにやりとしたところのある金髪の女で、ちよつと可愛らしい三毛猫のかんじ

である。素朴で強健で正直者のカウ・ボーイとのコントラストがこの映画を効果的にしてゐる。
英首相はマクミランになつた。これは右派の主導性を示す。

一月十二日 土 曇風

大島氏の論文。午後は約束通り「文芸」のために平野謙氏と対談。彼は荒氏よりはおうらかで、理解も偏せず、氣もちがよかつた。「文芸」の編輯主任の巖谷氏も来る。小波氏の三男也^(四)。彼らはこれからどこかで一酌するらしい。

一月十七日 木 晴

なんとなく風邪氣味ながら、寐こむほどでもないので平常の生活をくり返してゐたうち、終に月曜日から床につき、今日は半日おき、午後の入浴のあとまた床に入るといふ仕方でも過した。食氣がないので、精力がないが、次第に恢復に任せよう。小田切氏のハガキと迷路評のつたアカハタがとどく。かんたんな批評なれどはじめて見当外づれでないことを書いてくれてゐる。

終に寐るまでになつたのは、日曜日、いつもの私特有の仕方で午後のフロに入り、暖つて床にゐたところへ中川さんのタマちゃんが来て起されたのと、月曜日には伊都子が今度結婚した松尾氏と同道にて来訪。松井は宿りですすで、むりをしたのと冷えた為らしい。一つはずつと大島氏の論文の耽読で疲れてをり、暮れと正月のごた／＼の影響がみんな重なつたものらしい。

一月十八日 金 晴

小田切氏へ礼状、先生へ手紙。

岩波から中国の陳文彬さんの手紙を廻送して来る。北軽で逢つてゐた、即ち「迷路」の黄安生で、おもひがけなく、なつかしかつた。彼が中国の国語研究所のやうなところへ勤務の事は谷川さんにもきいてゐたが、いかにも敬意と親愛にみちた便りで、それを書かした直接の原因は、「世界」の一月号の「山よりの手紙」を読んだ為である。彼は私の作品をずつと読んでをり、一度出掛けて来てくれといつてゐる。たしかに行けば彼はもつとも悦んで迎へてくれるに違ひない。また彼が私に教へてくれた二つの中国の話が、いかに大きな影響を私に、またあの作品に与へてゐるかは、考へても不思議なくらゐである。思想的にも中としつかりしてゐるらしい。

今日は弥一のけいこなれど昨日デンポオで断つた。

一月十九日 土 わづかに雨、晴

先生へ魚ミソ漬送る。

ほとんど四十日ぶりで、わづかながら小雨があつた。おだやかな真珠いろの空、ところ／＼には淡い青いろが透いてゐるほどであるが、そのほのかな明るみを通して細い音のない雨が三十分ぐらゐもつゞいたらうか。

ほこりで白くなつてゐた瓦も久しぶりに艶がもどり、庭木の緑にもうるほひが出て、蒸発しきつてゐた天地がほつと吐息をついてゐるかんじ也。みんな人にあげて皆無になつてゐた「迷路」が数組とどく。北軽より安東のハガキ。十六日に素一の土地山火事になり、市河山荘も一時案じられたが、百坪ほどで消しとめたとの報告。よいあんばいであつた。なんとか心づけをすべきであらう。Sへ

毎月のものゝ外、研究社から暮れに来てゐた小切手封入送金。午後少し眠る。少しづつ力づいて来る。高浜氏へ手紙二十二日のうたひ会不参のことを書く。

一月二十日 日 晴

からだ次第に力づいては来たがまだ本統でない。怠りのハガキ手紙など書く。三枝さん玄関まで。来月十日位には家も出来あがつて引つ越しとのこと。

明日は百合子さんの祥月命日。例により花を贈るため久々に駅前の花屋まで行く。チューリップ、シネラリア、ラッパ水仙をえらび、届けさせる。うちにも黄いろい千鳥草と小菊のほか、緋のシクラメン一鉢。400。これはいつもお正月に買ふのが、今年はおくれたわけ。

岩波から「迷路」の追ひ注文のものといつしよにフローベルの「感情教育」とマルクス・アウレリウスの「自省録」とどく。

一月二十一日 月 晴

中国の陳さんに返事をかく。その他金次郎の病氣についてウスキの道郎へ手紙

一月二十二日 火 晴

からだの調子は次第によいが、まだセキがすつかりは止まらない。今日のカマクラ行きを見あはせたのはよかつた。無理をすれば行けなくもなかつたが、声もよくでないだらうし、それに夜に入り、他家へ泊つてはうちのやうに行かず、またぶり返しになるだらう。

先生からの返事の手紙に北軽も雪なく、浅間も肌をまだらに現はしてゐるとのこと。珍しい。しか

し明け方は○・十度の冷えこみといふのに、先生はその中でかはりない勉強生活をつゞけてゐられる。なにか超人的なものさへ感じられる。

フローベルの「感情教育」をベッドの中で読んだりの、私はなにか病気を頼んだ閑日月がつゞいてゐる。ひとつはなりたけ無理はしまいと思ふからである。

一月二十三日 水 晴

もう五十日からの乾燥で、大口の電力使用には制限がはじまつた。芸術院の会員の第三部の補充に桜間さんが入つた。これはよいことだ。ところで第二部は堀口大学のみ一人はいつた由、あんな自己すいせんで走り廻つた男がいつたのはむしろ不快なことだ。きつとあとの票は分散してしまつたのであらう。

婦公の「題言」をすます。「文芸」の平野さんとの対話の校正をも。三枝子が午後ちよつとおしやべりに来た時、杉村明平氏(補)の「迷路」評をもつて来る。あの作品がいゆる文壇批評の対象にならないで、かゝるグループにのみとりあげられることは、日本の現代文学のコースの歪曲を示すものといへる。杉浦氏が荒氏などより細かく公平に——彼なりに——読んでくれてゐるのに感心した。

一月二十四日 木 晴

今朝寢室で眼が覚めた時、グルッグルッグルと鳴く土鳩のこゑをきく。春はもう来てゐる。ずつと半月以上もまへにも、ピーピー、ピーピーとふた声づゝ笛のやうに鳴く小鳥の声を耳にした。先生から魚ミソ漬着の手紙とどく。ウススキに空也小包にする。

一月二十五日 金 晴

河野さんのプルタルコスがよみ売り賞をえてゐるニュースを昨夕刊で見たので、一寸お祝ひのハガキを書く。文学では三島さん、なほ吉田健一氏のシェクスピアも受賞、これはどんな仕事だらう。もとの古いものを書き直したのか知ら。午後明子一寸来る。金次郎の病氣のついでに心配。ずつと六度六分で、それでも用心して臥床をつゞけてゐたところへ、少し目まひがして、尿もわるく、ジン臓がわるいとの事。それなら氣長仕事になつたわけ也。

やつと家業のことが心配なくなつたところで、世の中のめぐりあはせといふものが今更に思ひやられるが、しかしもう一度しつかり治療して無事にしてやり度い。

夕方おそく吉野源三郎氏来訪。「迷路」完成のお祝ひの話、やめて貰ふのが一番よいこと。それでどうしても氣がすまなければ、店の会議室ぐらゐでかんけい者だけで食事でもしてくれと頼んでおいた。

一月二十六日 土 晴

朝松井がテラスの前の木犀のところへ鳩が死んでゐるといふので、をりて見ると、なるほど一羽の雉子バトが追ひつめられたやうな恰好で、石段の隅に、ちよつと見にはほんのうづくまつたやうになつて死んでゐた。モキと正子を呼んで来る。猫のしわざときめる。上村さんよりの崖からこのごろ数羽づゝよくあがつて来るので、謙が小さいエサ台を拵へて、エサをおいてやつてゐたのだといふ。それこそ鳩羽いろの羽毛でふつくりして、右の足のところにゑぐられた傷らしいものが見える

が、血のあともなく、まるで生きてゐるに変わらず、眼をつむつてゐるのが、なにか哀れ深い。

こんな事とかんけいはない筈ながら今日の新聞は人の死を大きく報じてゐる。重光さんが急死、小林一三氏も急性心臓ゼンソクとかで亡くなつてゐる。志賀潔氏の死は昨日報じられてあつた。一体に正月の末から二月にかけては毎年人の死の伝はることが多い。死といへば自省録の今日よんだ部分にも、あの哲人皇帝は死についていろ／＼書いてゐる。人間の肉は血と小さい骨と、神経や静脈や、動脈を織りなしてゐるに過ぎないこと、また過去は失はれたもの、未来はまだ失ふことは不可能だ。それ故死によつて人間が失ふのは現在といふ瞬間に過ぎないから、三千年、三万年生きてても、若く早死するものと違ひはないと書いてゐる。人間が失ひうるのは現在といふ持つてゐるものだけ、何人も自分の持たないものを失ふことはできない云々。この意味でなんにも持たないことが、なんにも失はないことにもなる。富でも、名誉でも、地位でも。この境地にまで達すれば、それこそ浮世のもの思ひはないわけであらう。

この間からつゞけてゐた「感情教育」読了。訳者の生島氏の解説によれば、フローベルは自分ではこの作品をボヴァリー夫人以上のものとしてゐたが、一般的の世評はよくなかつた由、しかしボヴァリー夫人で描かれたのは「彼」であつたが、これでは彼の時代を描くことが主題になつてゐた。

河野さんが「迷路」に見つける共通点はそれなのであらう。しかし私から見ればこの主人公のフレデリックは同じく良心的といつても、「迷路」の主人公とは型のちがつた存在であり、迷ひ方やその手管は、多岐で、且つフランス人らしい情感への耽溺は、「迷路」の主人公などは夢想もしえないも